貴下ハ先以陸海詳日夜軍事の大事ニ尽
力〻被為大賀之至　松平肥前殿方ニ而も
幸ハ御聊卿殿様御冊　神武太平策
なるもの八側の事ニを心配致し候佳辭ゆへ此
回の大事を坐視致しかたく此心配ニ相成候へ共
逆に病を押し乾草院ニ居候ニ付陸海軍
の将官達ちへ結ひ而後ニ有之し兵士も論
兼ねる次第のものハ実ニ軍事の機密ニ係り之
然ゆへ先ツ一本を大本営へ差出し
大元帥陛下の御許可を得るにあらざれども
卑心安からざる故是非其下を揮て其奉せ
の事御座候ひ該書配布の方法ハ未たさまれ
因而然し候へ共而ハ御承引ニ而
病中ニて兎角筆も不行届候ゆへ文章も亦雅順
ならざる且つ其道専ら兵学第一の兵家の旅後
ニ之別ハ撰外の事ニ付御座候し大ニ兵の大戒
一と之を掲出し其小冊たるものと云て第一ニ
説ニ大戒を得し国家を亡滅の域ニ陥る也
めざらんこと是れ拙者の国家ニ尽す所以の微

意ニ御座候
今より三十余年前を回顧
致し候ニ拙者が兵学修行仕り指揮蒙成
ごく生活の為故ニ窮し将官ニ任し　今日
ニ到り大事に任し四十年ニ国家安全の
端緒のみならず克く始めあるものにして
兵事を指揮し病体の身ニて尚も深く歎き
のみれ致しかたく申すへく遺憾の山程
御学研ニ而先し病中ニ付候ハ未タ尽すへからず
程難めし極ニ付し易き事も
なるのみならず後ニ之を揮て其ニ許可ニて配慮候

すなわち是ニ付申上候へ共元帥へも

意之有之　今より三年間をおを回顧
致しに当時批者が兵学頭に任じ指揮養成
致し生徒の多数が寥々将官を位し今日
以大事に任じ四方に諸侯に至家憂運の
端緒のみならず克く始終あるとのみして
屋業を捨病餘の生命にあるとのみにて
のみにて張くばるより外なし漢に歓喜
国学研究を志し只管病中
桂雑のまゝ西を望し月方を
るの不敢に涙ならぬ拙方をもつて配意
すらくに見つ教すの口頭じめ必教之師へも
口通告らるべし敢此之等しく敬也

四月廿六日　陽軍中将
陽軍大将　鳥尾小弥太
桂　木戸孝允

遺敵の山陵
対へず

吉野屋製

四月廿六日　鳥尾小弥太

封

心理大臣　桂太郎殿
親展